

出雲藩屋敷と尾道商人

—尾道・旧出雲藩屋敷跡を訪ねて—

森本 幾子

旧出雲藩屋敷跡を訪ねて

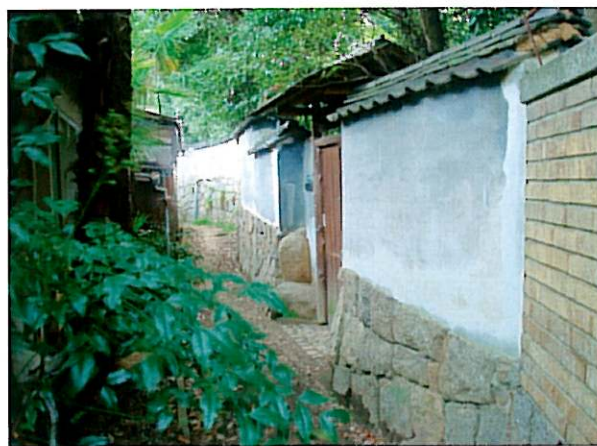
広島県尾道市は、小高い山の名刹を縫うように連なる坂道とおだやかな瀬戸内の情緒が今なお残る港町である。千光寺という真言宗寺院が有名であるが、この寺へ通じる道は千光寺道と呼ばれている。この千光寺道を上る途中、坂の左手に古めかしい洋館があり、その傍らに小道が細長く延びている。その小道を進むと蘇鉄と竹藪が生い茂る独特の雰囲気包まれた塀が前方に現れる。時代に取り残されたようなこの塀の内が、旧出雲藩屋敷跡である。

ここは、近世期、出雲藩が尾道に設けた出張所としてその歴史的役割を果たしていた。この頃、諸藩は大坂へ米穀を移出し、堂島の商人を蔵元や掛屋として米を売却させ藩財政を切盛りしていた。しかし、地域市場の発展や情報の発達が進むなかで、近世後期～幕末期には、大坂まで米を運ばずに、途中の湊で売却する藩がでてくるようになった。出雲藩も、尾道という良好の湊町で尾道の豪商に米の売却を請負わせていたのである。近世の尾道は、広島藩の主要な湊として北前船が寄港し、米穀類・肥料の干鰯・瀬戸内や九州から運ばれる綿などの交易湊として栄え、財をなした豪商が居を構える瀬戸内経済の要所であった。今回は、近世から近代にかけての出雲藩屋敷とそこに出入りしていた尾道商人について紹介したい。

出雲藩屋敷における廻米御用 ～橋本家による藩米売却請負

尾道の出雲藩屋敷の主な役割は、藩米の売却であった。尾道の有力商人の橋本家は、屋号を角灰屋と称し、尾道にて金融業を営んでいた家であり、同家吉兵衛は、嘉永期に出雲藩から「雲州廻米問屋」に仰せ付けられた。嘉永6年(1853)に出雲藩から藩の御手船で尾道まで運ばれた米は、1,455俵(596石余)〈2月〉・2,000俵(820石)〈3月〉・1,455俵(582石余)〈5月〉・6,900俵(2,760石余)〈6月〉・3,500俵(1,344石)

〈7月〉・627俵(245石)〈8月〉であり、橋本吉兵衛がこれを請け負っている(「雲州御米算用帳」広島県立文書館所蔵橋本家文書No.860)。米の値段やその売却については出雲藩屋敷において、藩の役人と橋本家をはじめとする他の尾道商人との間で相談して決定していたのであろう。出雲藩屋敷は、出雲藩財政にとって欠かせない出張所となっていたのである。



旧出雲藩屋敷跡(尾道市・東土堂町)

出雲藩士の食事～大紺屋による料理仕出し

出雲藩士は、藩米の売却や隣国の福山藩の主要湊である鞆浦への出張の際には、出雲藩屋敷にて生活しなければならなかった。これら藩士の朝昼夕の料理仕出しについては、尾道商人・大紺屋佐兵衛が担当していた。大紺屋もかつては出雲藩の廻米御用を請け負っていた商人である。幕末期と推定される大紺屋の記録には、出雲藩屋敷において藩士が食べていた料理献立が記載されているので、その一例をみてみよう。

初夏の4月には、贅沢なことに朝昼夕を通してすべて鯛が登場し、その他季節の物も見られる。夕食には、穴子が竹の子とともに姿を見せている。11月には、錦大根や細魚・菊菜など旬の食材が食卓に並び、夕飯には蠣鍋が出されて、藩士たちは冷えた身体をあたためられたことだろう。4月の鯛刺身や11月の細魚糸作りを食べる時には、千代口(「ちょこ」と読み、

器である「猪口」の意で、またその器に入れた料理のことをも指す)溜りや千代口代々(橙)酢などが添えられている。その他に酒などもふるまわれ、出雲藩屋敷に出張している藩士たちは、瀬戸内の旬の食材がふんだんに盛り込まれた料理を堪能することができたものと思われる。

出雲藩屋敷における献立(一例)

年月日	朝	昼	夕
子4月9日	皿(鯛焼物)汁(みそ・くずし・青ミ)平皿(花かつうを・豆腐・のり・かやく)	向(生盛鯛平作り・めうが・目しそふ)汁(五とふ味噌・鯛の子・青ミ)菓子椀(椎茸・花こち・うと)	鉢(うと・鯛刺身・三ツ葉・千代口たまり・わさび)井(あなこ・竹の子)井(えんとふ)井(漬もの)
子11月9日	煮染かつうを煮・ひじき・香の物	向(海老いり出し)汁(みそ・くずし・青ミ)・漬もの	鉢(錦大こん・さより糸作り・菊菜・千代口代々酢)鍋(蠣・豆腐)煮染こんにやく・かす漬

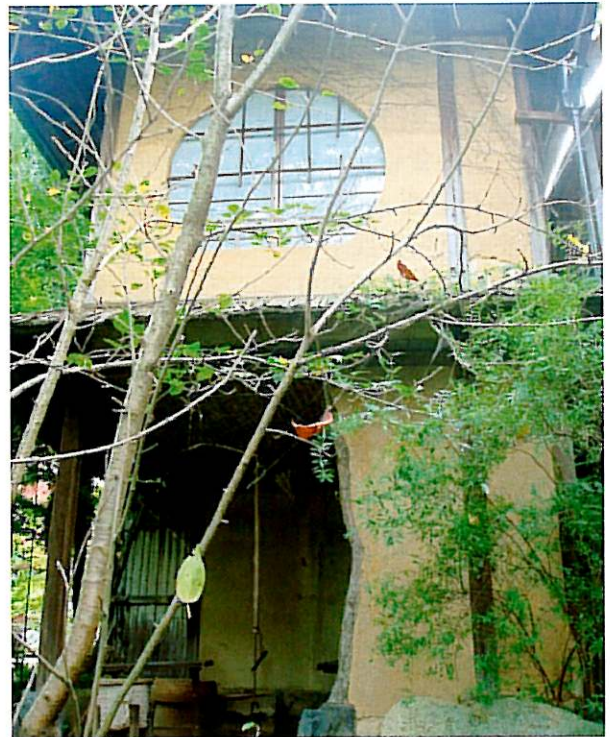
〔毎日献立〕広島県立文書館所蔵橋本家文書No934より)

明治以降の旧出雲藩屋敷～島居家による買取

やがて明治へ時代が移り、出雲藩屋敷も藩の出張所としての役割を終えることとなる。明治初期の公開入札により、旧出雲藩屋敷は、当時尾道で薬種問屋を営んでいた島居家が別荘地として買取ることとなった。現在のご当主・島居勝氏のお話によると、この辺り一帯は、もともと寺と出雲藩屋敷のみで、民家が建てられるようになったのは明治期になってからということである。特に別荘地として人気が高かったらしい。明治以後、旧出雲藩屋敷は、尾道の豪商が取引先を接待する場所として使われていたという。

また、出雲藩屋敷にも藪内流の茶室が残されていたが、明治後期に島居家は、旧出雲藩屋敷跡地の一面に風流な二階建ての茶室「帆雨亭」を建てている。この茶室は一階が腰掛け式の茶室で、天井には、中国から輸入した薬種が入っ

ていたという行李がそのまま利用されるなど、おもしろい趣向が凝らされている。二階は、庭に咲く桜や季節の草花を眺めながら休憩ができる座敷となっており、小高い山の中腹にあるので、尾道水道を行きかう大小の船々を望遠することができたであろう。



茶室・帆雨亭(尾道市・東土堂町)



帆雨亭天井

*明治以後の旧出雲藩屋敷については、尾道市を訪れた時、現在のご当主・島居勝氏にご教示を得ました。また、旧出雲藩屋敷および帆雨亭の写真については、島居氏のご厚意により掲載させていただきました。急な来訪にもかかわらず、ご親切に説明をしてくださった島居氏に心から感謝の意を申し上げます。